



TITLE:

<研究論文>女性の生涯発達研究に関する一考察: アメリカにおける研究の概観を踏まえて

AUTHOR(S):

竹家, 一美

CITATION:

竹家, 一美. <研究論文>女性の生涯発達研究に関する一考察: アメリカにおける研究の概観を踏まえて. 教育方法の探究 2006, 9: 73-80

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190318>

RIGHT:

女性の生涯発達研究に関する一考察

——アメリカにおける研究の概観を踏まえて——

竹 家 一 美

1. はじめに

Gilligan が、発達心理学者として女性の視点を含めた発達理論を創る必要性を説いて以来、女性の発達に対する関心が高まり注目されるようになった。彼女は『もうひとつの声 (In a different voice)』(1982)という著書において、従来の発達理論に基づいて女性の発達を調べると矛盾が生じるのは、女性の発達の方に問題があるのではなく、理論そのものに欠陥があるからだとして指摘した。Gilligan は、従来の人間一般とされてきた発達理論、たとえば Erikson (1950) の自我発達論や Kohlberg (1969) の道徳性発達論は、男性の「声」のみをとりあげ、女性は男性と「異なる声」を語っていることを無視して作られたものだとして主張している。

Gilligan は、児童期から成人期後期までの男女に道徳判断に関する面接を行ない、男性は規則と権利によって判断するのに対して、女性は人間関係における思いやりと責任によって判断することを見出した。この結果から、男性と女性で道徳性が異なることの基盤には、分離と愛着という2つの自己のあり方があると結論づけた。分離とは、自己を世界から離れたものとして捉え、他者や世界からの自律をめざすあり方、一方愛着とは、自己を世界との関係において捉え、他者と相互依存したものとして自己を経験するあり方である。

人間の生涯発達に女性の独自性という視点をもたらした Gilligan の研究は、心理学のみならず教育学や倫理学など多方面に波紋を投げかけ、アメリカ内外に広く影響を及ぼした。

そこで本稿ではまず、この Gilligan の研究を踏まえつつ、Gilligan 以降のアメリカにおける女性の生涯発達研究を概観し、諸研究の比較・考察を試みる。次に日本における女性の生涯発達研究にも触れながら、今後の課題と展望について考察していく。

2. アメリカにおける女性の生涯発達研究

Gilligan 以後、女性の視点に立った女性の生涯発達研究が漸増し、成人期以降の女性に見られる発達の特質が指摘され、議論されるようになってきた。

ここで成人期とは、生物学的な年齢、または年齢相応の役割や機能の観点から定義されうる時期ではあるが、成人であるための基準を示すとなると明確化し難い時期でもある。法律的に20才以上が成人と認められるとしても、行動上、大人とはいえない人は少なくない。そこで本稿では、心理学領域における先例(e.g., Kroger, 2000; Levinson, 1978)に則り、成人期を青年期と老年期の間と捉え、目安としては20代前半から60代半ば(23歳～65歳)頃までとする。

(1) 女性のライフサイクルに関する研究

1970年代頃から、Levinson (1978)、Gould (1978)、Vaillant (1977)らによるライフサイクル全体を視野に入れた成人発達論が提唱されるようになった。しかし、それらの大半は男性を対象とした研究であり、成人期女性の発達に関する研究はまだ少なく、知見の蓄積も乏しかった。当時は、女性の研究者による女性を対象とした発達研究(e.g., Josselson, 1973; O'Connell, 1976)が広がり始めた時期であり、女性の発達の特質は指摘されつつも、明確な理論化までには至らなかった。

このような状況が続くなか、1980年代後半になると女性のライフサイクル全体を展望した研究が目立ち始める。たとえば Mercer ら (1987) は、アメリカ合衆国に住む60歳以上の白人女性80人を対象に、回想法を用いて幼児期から現在に至るまでの各時期について、地域や社会の出来事、重要な他者、そして転換期的な体験を聴き取った。ここでの「転換期 (transition)」とは、これまでの人生をふりかえり、これから先の生き

方を展望する時であり、したがって新しい状況や役割、責任に適応するために、さまざまな面で不安が体験される時期をいう。この研究で Mercer らが、面接調査から得たデータを分析した際の視点は次の通りであった。すなわち、①女性のライフサイクルにも、男性と同じような普遍的な年齢に対応した転換期があるのか、②母親であることは、ライフサイクルを通じての女性の発達に影響を及ぼしているのか、もしそうであるならば、どのような影響を及ぼしているのか、③女性のライフサイクルのなかで転換期と認識される体験には、どのような出来事や要因が先行しているのか、という3点である。その結果、対象者に共通する5つの転換期が明らかにされた。

第1の16歳から25歳にかけての時期は、出生家族からの旅立ちと成人期への船出の時期であり、活動的である反面、不安定な時期でもある。第2の30歳頃は、それまで体験してきたさまざまな転換期的な出来事や活動性が安定していく時期である。第3の40歳の転換期は、自分のための自由が得られる時期、もしくは自己解放の時期と見なされる。これは、男性では一般的に20代初期に認められうる。そして、第4の60代前半の再生・再方向づけの時期は、現役引退後に恵まれた時間を、再び充足感の得られる活動へと向ける時期である。最後の80歳の転換期では、自身や愛する者の病気や不健康という破壊的な要因にみまわれると同時にまた、創造的な活動による充足感が、満足感と統合性の感覚をもたらす時期でもあったという。

この研究で特筆すべきは、対象者から報告された、あらゆる「転換期」的体験を、大恐慌や第2次世界大戦などの歴史的事象、年齢、個人内あるいは対人的・社会的動機づけ、事故や病気等の非規則的なライフイベントという多種多様な次元で分類し、女性のライフコースのなかで、それらが女性の発達にどのように影響を及ぼしたのかについて考察した点であろう。特に40歳の転換期に見出された「愛着と分離の葛藤」は、男性であれば一般に、青年期に認められうるテーマであり、女性性特有の事象として注目される。

もう1つ、女性のライフサイクルに関する研究の代表的なものとして Levinson (1996) の研究があげられる。Levinson の成人期の発達段階説 (1978) は、わが国でも『人生の四季』(1980) として翻訳されており、

今日の成人発達論の主要な理論の1つとされている。

彼は、個人の「生活構造」(life structure: ある時期におけるその人の生活の基本的パターンないし設計) という概念を用いて個人と外界の相互関係を分析し、①各人の生活構造は、成人期には、比較的規則的な一定方向に段階を経て発達していくこと、②成人期の生活構造の発達には、安定期 (生活構造が築かれる時期) と、移行期 (生活構造が変わる時期) が交互に現れ、進んでいくことを見出した。そして、成人期には40～45歳の人生中間の移行期 (Mid-life Transition) と、60～65歳の成人期後期移行期 (Late Adult Transition) という2つの大きな転換期が存在することを明らかにした。Levinson は、中年期の移行期を成人期の重要な転換期であるとし、中年期に顕在化しやすい「若さと老い」、「破壊と創造」、「男らしさと女らしさ」、「愛着と分離」という基本的対立を、自分にふさわしい形で解決すること、すなわち、これらを認め自己の内部に統合していくことが、中年期の課題であると論じている。

そして、その18年後に発表された著書が、女性を対象に前著と同じ枠組みで行なった研究成果をまとめた“The Seasons of a Woman’s Life” (1996) である。調査対象者は、企業で働く女性、大学の研究者、専業主婦各々15名、計45名であり、幼児期から現在までの人生について15～20時間ほどの集中的な面接調査が行なわれた。その結果、男性のライフサイクルとほぼ同様の発達プロセスが見出されている。3つのライフスタイルの相違に関しては、有職女性の方が専業主婦よりも幸福感が高く全体的により良好な心理状態を示した。有職女性は職業と家庭の両立の困難さに直面してはいるが、仕事、家庭、母親役割のバランスが、このような良い状態をもたらしていると考えられている。

Levinson のこの研究は、おそらく Gilligan の影響を直接受けてのものではないだろう。彼は男性の発達段階説を提唱した前著 (1978) において、既に成人期の発達プロセスにおける性差の問題を研究する必要性を示唆している。したがって、女性のライフサイクルを研究することは、Levinson 自身に残された課題であったと考えられる。Levinson が独自の「生活構造」概念を用いて調査した結果、性差があまり見られなかったという分析は非常に興味深いと思われる。

(2) 女性のアイデンティティ発達に関する研究

① アイデンティティ論とその広がり

Erikson (1950) による「アイデンティティ」とは幼児期以来形成されてきたすべての同一化や自己像が青年期において取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性、連続性を持った自我の確立の状態である。Erikson (1959) 自身も述べているように、アイデンティティの形成は「青年期に始まるわけでも終わるわけでもなく」「大半は生涯にわたって続く無意識的な発達過程」(p149)である。したがって、生涯発達の観点から人間のあり様を包括的に捉える視座として、アイデンティティ概念は非常に有益である。

この Erikson のアイデンティティ論を実証的に研究するために考案されたのが、Marcia (1966) によるアイデンティティ・ステータスである。彼は、アイデンティティの様態を、①アイデンティティ達成、②モラトリアム、③早期完了、④アイデンティティ拡散の4つの地位 (status) に分類した。

1960年代から1970年代においてアメリカでは、この Marcia の測定法を用いて Erikson のアイデンティティ論を研究する者が続出した。そして、1970年代後半から1980年代には Erikson の理論と Marcia の測定法が女性の自我形成に適用しないのは、女性の自我形成に問題があるのではなく、理論と方法そのものに問題があるからだという議論がなされるようになった。主に女性研究者からのこうした指摘は、まさに冒頭で述べた Gilligan (1982) の主張に一致するものである。

② アイデンティティ・ステータスを用いた研究

Josselson (1987, 1996) は、青年期から成人期にかけて女性のアイデンティティがどのような形成過程を辿るのか、その過程にはどんな道筋があるのかを縦断的に調査した。彼女は、大学生時代にアイデンティティ・ステータス面接を行なった女性を、その後40代前半まで追跡し、青年期以降のアイデンティティ・ステータスの変化プロセスを精神力動的な観点から分析した。そしてその結果、男女のアイデンティティ形成における差異、すなわち、男性のアイデンティティ形成が、学位や経済的成功のような客観的基準に左右されるのに対して、女性のアイデンティティ形成は、重要な他者の反応に依存するという特徴を見出した。

これを踏まえて Josselson は、男性のライフサイクルは個としての自律や達成に向かう直線的・段階的なものであるが、女性のライフサイクルは自己や他者をはじめとするさまざまな人生の要素を含む「同心円」的なものであると喩えている。

Josselson はこれらの研究で、Gilligan (1982) とほぼ共通する見解を表明した。両者は、女性の発達における他者との関係性の重要さ、そして関係性をもつことが、自律や達成を目指すことと同じくらい発達にとって価値があることを主張したのである。

ほかにも、青年期以降のアイデンティティ・ステータスの発達プロセスを検討したものは、数多く見られる。たとえば Hart (1990) は、女性の大学時代と中年期におけるアイデンティティ・ステータスの変化を、縦断的に検討している。その結果、約半数の女性が、21歳の大学時代と43歳の中年期に同じステータスに分類され、大学卒業後の20年間の生き方の特徴は、大学時代のアイデンティティ・ステータスのもつ特徴を非常によく反映したものであった。Kroger と Haslett (1991) は、40～63歳の男女100名に Marcia (1966) の面接法に性役割を加えたアイデンティティ・ステータス面接を実施し、青年期から中年期までのアイデンティティ・ステータスの発達プロセスを検討している。学歴とライフスタイルによって8つのサブグループを設定した結果、各々のステータスの変化経路には著しい相違が見られ、パーソナリティとライフスタイルはアイデンティティ・ステータスの変化に大きく関する要因であることが示唆されている。

③ 職業とアイデンティティに関連する発達研究

女性の発達と職業に関連する研究は、1980年以降、急増している。内容も、女性の職業アイデンティティの形成に関するもの (Spain & Bédard, 1991 ; Phelps, 1991)、職歴の安定と変化のパターンを職業アイデンティティの概念から縦断的に考察したもの (Spenner & Rosenfeld, 1990)、大学への再入学と仕事への関心を検討するもの (Low & Bailey, 1990) など多岐にわたる。とりわけ女性の生涯発達にとつての今日の問題として、職業と家庭役割のアイデンティティ葛藤に関する研究は重要である。

Hornstein (1986) は、中年女性を対象に仕事への関

与のしかたと、成人女性が生活のなかで担うさまざまな役割への関与のしかたを検討している。その結果、20代から40代初期まで、一貫して仕事への関与のレベルの低い女性（第1群）は、伝統的な母、妻、ボランティアとしての役割に対して肯定的で、自信をもった見方をしていた。仕事への関与が低いレベルから高いレベルへ変化した女性（第2群）は、基本的には第1群と同じであるが、伝統的な役割遂行に代わるものとして職業へ関与することで、役割関与のしかたを再構築していた。青年期から一貫して仕事への関与が高い女性（第3群）は、職業人、母親、妻、ボランティアとしての複数の役割への関与をうまく統合していた。

そのほか、大学在籍中の母親と一般の母親のアイデンティティと自己評価、育児への態度等の相違を検討した Watkins (1983) の研究や、母親アイデンティティと専門家アイデンティティの葛藤と統合について考察した Comart (1984) の研究など、成人女性がこれまでの伝統的役割や価値志向から脱却し、新しい個としてのアイデンティティを獲得しようとする際に生じる問題を多面的な角度から検討した研究が見られる。

④ 母親アイデンティティに関する研究

妊娠・出産期は、母親としてのアイデンティティが形成される時期であり、子どもの巣立ちを迎える「空の巣期」は、母親役割の終結期である。いずれも母親としてのアイデンティティにとっては大きな転換期であり、それだけにこれらの時期の女性を対象とした研究は早くから興味・関心の対象となった。

Gottesman (1987) は、20～37歳の妊婦41名を対象に、自我の発達レベルと母親アイデンティティの形の関連性を検討した。その結果、親になることへの動機づけ、胎児への愛着、母親役割への同一化のどれもが母親アイデンティティを構成する重要な要素であり、これらと自我の発達レベルとの関連性が認められた。

また Pridham ら (1991) は、出産後の母親140名を対象として、母親としての態度、哺乳計画、出産条件、養育・世話の能力の関連性について検討した。この研究からは、母親役割への積極的関与や母親アイデンティティの形成には、出産時の援助や心理社会的環境などの出産体験が大きな意味をもつことが示唆された。

他方、「空の巣期」の母親アイデンティティに関す

る研究も多々見られるが、この時期の女性を対象としたものには臨床的研究も多く見受けられる。アイデンティティ・ステータスを用いて自我の発達と「空の巣」状態に対する態度の関連性を検討したもの (Gonzalez, 1990)、ポスト子育て期の「空の巣」段階にある中年期主婦のアイデンティティを検討したもの (Ellett, 1982)、「空の巣期」前後の自我統制様式の変化を探索したもの (Cooper, 1987) などが典型的な例であろう。

(3) フェミニズムの視点による研究

アメリカにおける女性の生涯発達研究を概観すると、フェミニズムの影響を無視することはできないと思われる。心理学におけるフェミニズム視点の導入の背景には、アメリカ社会の状況が深く関わっている。

1960年代後半のアメリカでは、公民権運動が成果をおさめ、ウーマン・リブが広がっていった。1970年代始めには、黒人解放やマイノリティの問題が問われるなかで、抑圧や性差別からの女性の解放と男女の平等をめざすフェミニズムの視点から、女性たちは種々の制度や法律を変えていった。このようなアメリカ社会の状況に呼応して、心理学の領域においてもフェミニズムの視点が導入されたのだと考えられる。

アメリカにおいては、フェミニズムの立場から女性の生涯発達を研究する研究者は非常に多く見られるが、ここでは、臨床心理学の観点から女性の研究を行なう Miller とフェミニズム心理学を標榜する Downing らの研究を紹介する。

Miller (1986) は、女性を対象とする研究には、新たな視点から出発する「新女性心理学」(“Toward a new psychology of women”)が必要であると主張した。彼女の説く新たな視点とは、現実生活での女性の経験を綿密に研究し、男性の経験を記述するモデルや言語ではなく、女性の経験を記述するのに適正なモデル・言語を作り出していくという視点である。Miller は、女性の自我形成における「結びつき」や「関係性」の重要性を、臨床経験を通して指摘した。Miller によれば、女性にとって「結びつき」は非常に大切であるので、それを失う恐怖は単に関係の喪失ではなく、自己全体の喪失に近いものとして感じられるという。しかし、一方で女性の「結びつき」への欲求が、積極的に実現すれば、社会、とりわけ「分離」と「個性化」を基盤

とする現代西欧社会の進展に大きく寄与すると彼女は考察する。すなわち男性原理が支配し、暴力・競争・疎外感・コミュニティの喪失などが顕在化する現代の西欧社会に「結びつき」と「相互性」を基盤とする女性原理がもたらされれば、これらの問題は解決し人間らしい社会が築かれると説くのである。

Downing と Roush (1985) は、抑圧や性差別から女性を解放し、男女の平等を目指すフェミニズムの視点に立って、フェミニストとしてのアイデンティティの発達段階に関するモデルを提示した。さらに、その発達段階を測定する尺度を作成し、その発達を援助するための治療方法も考案した。このフェミニスト・アイデンティティ発達モデルは、Cross (1971) によって提出された黒人の自我形成の発達モデルを参考にして Downing らが、自らの臨床経験に基づいて創りあげたものである。

Downing と Roush (1985) のフェミニスト・アイデンティティ発達モデルは、次の5つの段階から成る。

第1段階は、「受身的受容」(passive acceptance) である。この段階では、女性は抑圧や性差別に気づかず男性中心の現体制を批判なく受け容れている。伝統的性役割に疑いを持たず、男性は女性よりも優れているとみなす。第2の「意外な新事実の発見」(revelation) 段階で、女性は男性中心の現体制に気づき、そこに寄与する困難や矛盾を経験する。抑圧や性差別に怒りを感じると同時に、今までそこに参加してきたことに罪悪感を覚える。男性に対しては、すべての男性を否定的に見る。第3段階は、「埋没—発散」(embeddedness-emanation) という前後2つに分けられる。前半の「埋没」段階では、女性だけのグループに所属・参加し、同じ考えを持つ女性たちとの強い絆を結び、男性への怒りを発散するようになる。後半の「発散」段階になると、他の異なった考え方にも心を開き、男性とも慎重にはあるが交流するようになる。第4の「統合」(synthesis) 段階では、女性として人間としての両面を統合して、自分らしい自分を創り始める。伝統的な性役割を超越し、自分自身の価値観に基づいて選択・決定する。男性に対しては、固定観念にとらわれず個人として評価するようになる。最終段階は、「積極的関与」(active commitment) である。この段階になると女性は、抑圧や性差別のない社会作りのための活動に

参加することによって、フェミニストとしてのアイデンティティを確固たるものにする。男性に対しては、女性と対等であると見なすが、女性と男性が同じであるとは考えない。

このフェミニスト・アイデンティティ発達モデルは、実際の臨床場面で尺度とともに活用され、クライアントに有効な治療方法が示唆されているという。

(4) 女性の生涯発達に関する諸研究の比較・考察

以上、Gilligan (1982) の研究以降のアメリカにおける女性の生涯発達研究について、ごく一部ではあるが概説してきた。既に独自の成人発達論を展開していた Levinson (1978, 1996) を除けば、ほとんどの研究者の視座は女性の視点を採り入れたものであった。そして女性の視点を含めた発達理論の創成の必要性を提唱した Gilligan の「声」に賛同するかのように、多くの女性研究者たちが、女性の対象者から得たデータを分析、解釈して、女性の発達プロセスを明らかにするための実証的な研究を行なってきた。

特に、Josselson (1987, 1996) および Miller (1986) の研究は Gilligan の研究と通じる点が多いように思われるが、その他の研究においても共通点は見出せる。

彼女たちの研究に共通して見られる特徴は、①女性の視点、フェミニズムの視点を導入したこと、②アイデンティティの形成・発達における男女の様相の差異を明らかにしたこと、③プロセスを重視して女性の生涯発達を考察したことがあげられる。

1つめの、発達研究に女性の視点およびフェミニズムの視点を導入したという特徴は、ほとんどの女性研究者に該当する。従来の発達理論への批判から始まった女性の生涯発達研究において、女性の発達過程に問題があるのではなく、既存の理論自体に問題があるのだということを示すためには、女性の視点、フェミニズムの視点を導入することは不可欠であった。また、先述したように、アメリカ社会における公民権運動やウーマン・リブの勢いが増すなかで、フェミニズムが浸透していきやすかったことも事実であろう。

2つめの、アイデンティティの形成・発達の様相における男女の差異は、主に Gilligan, Josselson, そして Miller によって明らかにされた。彼女たちが共通して指摘する男女の相違点は次の3つである。第1に、男

性が学問や仕事などの業績達成を重視し、それを中心にしてアイデンティティを形成するのに対して、女性は人間関係を重視し、それを中心にしてアイデンティティを形成する点である。第2に、男性のアイデンティティ形成においては、分離—個性化の過程が基調であるのに対して、女性のアイデンティティ形成においては、愛着—相互性の過程が基調である点、だが、男性も女性も各々異なった過程を基調にしつつ、他の過程をも弁証法的に組み込んでいく様相も認められる。そして第3は、男性がアイデンティティの確立後に親密性を確立するのに対して、女性はアイデンティティの確立と親密性の確立が併行して行なわれるという点である。Erikson (1950, 1959) は、その心理社会的発達理論において、人はアイデンティティを確立してから親密性を確立すると述べ、この発達の順序は男女両性に適用されるとした。しかし Josselson (1973, 1987, 1996) と Gilligan (1982) は、各々の実証的研究において、女性においては、アイデンティティの確立と親密性の確立の両課題が融合しており、これらの発達課題は併行して同時に起こることを明らかにした。そしてそのうえで、Erikson のいう発達の順序は男性のみに適用するものだとして主張している。

3つめの、プロセスを重視して女性の生涯発達を考察したという点は、縦断的方法や回想法を用いた研究に幅広く共通する特徴である。ライフサイクル全体を視野に入れた研究、アイデンティティ・ステータスの変容を調査した研究、Downing ら (1985) によるフェミニスト・アイデンティティ発達モデルの研究など、いずれも女性の青年期から成人期にかけての発達のプロセスを丁寧に辿ったものである。Gilligan (1982) の道徳性発達研究がプロセスを重視した研究であったことは、言うまでもない。だからこそ、男性とは異なる女性の「声」を発見したのだろう。

3. 日本における女性の生涯発達研究

日本における女性の生涯発達研究は、1980年代までは Erikson (1950) の理論と Marcia (1966) の測定法に基づいた研究 (e.g., 岡本、1986; 園田・中釜、1989) が主流を占めていたが、最近はライフサイクル全体を視野に入れた研究が広がり始めた (e.g., 難波、2000; 岡本、2002)。女性を対象とした研究では、アメリカ同

様、妊娠・出産、「空きの巣」期、そして、成人女性のライフコースの多様化にともなう複数役割がもたらすアイデンティティの葛藤と統合等、女性特有の文脈に着目した研究が多い (e.g., 清水、2004; 前川ら、1996)。また、今日の状況を反映して、成人期女性と職業の関連を生涯発達の観点から検討した研究も増加している (e.g., 堀内、1993; 岡崎・柏木、1993)。

他方、フェミニズムに基盤を置いた研究は、日本では、主に心理療法家による心理臨床実践においてなされている (e.g., 河野、1983; 河野ら、1986)。

これらの研究のほとんどは、女性による女性のための理論の構築を目指すものであり、Gilligan (1982) をはじめとするアメリカの女性の生涯発達研究に強い影響を受けている。すなわち「男性は分離志向が強い」のに対し、女性は関係性への志向が強い」という主張を追試する実証的研究が多数見られ、実際、関係性の視点から考察を進める研究者は少なくない (e.g., 伊藤、1998; 岡本、2002; 杉村、1998)。

最後に、男性の手による女性の生涯発達研究として、西平 (1996) による成育史心理学を紹介する。彼は、内外の著名な女性の綿密な伝記を分析し、その生涯過程をまとめた。そして、健全性 X (底辺)、偉大性 Y (高さ)、超越性 Z (深さ) から成る3次元の人格ピラミッド・モデルを考案し、各女性の生き方をこのモデルにあてはめ、類型化した。

以上見てきたように、日本においても女性の生涯発達に関する知見は蓄積され、新たな広がりを見せつつある。しかし、アメリカに比べると質量ともに乏しいのは否めない。女性の視点に立った女性の発達に関する明確な理論やモデルの提示が待たれるところである。

4. 女性の生涯発達研究の課題と展望

Gilligan (1982) が主張した『もうひとつの声』とは、分離よりも結びつきの方を重要視する、男性とは異なる女性の語る「声」であった。これを受けて、多くの女性心理学者が実証的研究を行ない、分離と愛着という2つの自己のあり方を見出し、関係性の新たな見方を提唱し始めた (e.g., Archer, 1993; Josselson, 1994)。

日本でも杉村 (1998) は、他者との関係のあり方がアイデンティティ発達の重要な指標であるとして、従来の人格発達研究を批判している。杉村は、「個と関

係性」、「他者からの分離と他者との結びつき」等の2つの側面における発達を対立的に捉えたり、どちらか一方に価値を置くことはせず、両者の相互作用の中でアイデンティティが現れ、発達すると説く。2つの側面は生涯にわたって同等の価値をもつので切り離せず、そこに男女の違いはない。こう考えると、アイデンティティ発達における性差は、関係性の程度や質の問題になるという。伊藤（1998）も生涯発達における「個と関係性」を、性を特徴づける二分法的対立項として捉えずに、相互補完的な発達の2方向と見ることを提唱する。現在、日本人の価値観は多様化し、長寿・少子化によりライフサイクルも変化した。このような時代に必要とされる女性の生涯発達研究は、生き方を限定するのではなく、さまざまなライフコースを辿った女性についての研究であろう。その際、重要なのは職種等の外的状況と、状況を認知する能力や主体的選択等の個人の内的要因の相互作用が、発達とどう関連するかを検討することである。そこには関係性の問題も現れると思われるが、そこでの視点は、個と関係性を等価値で相互補完的に捉える視点が望ましい。発達を性差でステレオタイプに区別するのは、現在の社会状況に合致しないからである。今後は、女性の生涯発達をより総合的に解明するために、多様な女性の発達プロセスの研究が求められる。さらに、女性の特徴をより明確にするために、男性のデータと比較することも重要であろう。その際、関係性の問題はより本質的な内容に移るものと思われる。

引用文献

- Archer, S. L. 1993 Identity in relational contexts : A methodological proposal. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on Ego Identity*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum. 75-99.
- Comart, J.L. 1984 Integrating maternal and professional identities : A paradox for new mother. *Dissertation Abstracts International*, **44** (7-B), 2238.
- Cooper, K. L. 1987 Gender identity and ego mastery style in 43-to-51 year old, pre-and post-empty nest women. *Dissertation Abstracts International*, **47** (8-B), 3514.
- Cross, W. E. 1971 Negro-to-Black conversion experience : Toward a psychology of Black liberation. *Black World*, **20**, 13-27.
- Downing, N. E., & Roush, K. L. 1985 From passive acceptance to active commitment : A model of feminist identity development for women. *The Counseling Psychologist*, **13**, 695-709.
- Ellet, E. 1982 An investigation of identity and self-esteem in traditional married women during their middle years, and the impact of the Life Planning Seminar. *Dissertation Abstracts International*, **42**(7-B), 2629-2970.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York : Norton. 仁科弥生（訳）1977, 1980 幼児期と社会 1・2 みすず書房
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. New York : International University Press.
- Gilligan, C. 1982 *In a different voice : Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge : Harvard University Press. 岩男寿美子（監訳）1986 もうひとつの声 川島書店
- Gonzalez, P. C. 1990 Ego development and ego identity in mothers at mid-life. *Dissertation Abstracts International*, **51**(5-B), 2643.
- Gottesman, M. M. 1987 The relationship between maternal age, level of ego development, and progress in maternal identity formation. *Dissertation Abstracts International*, **48**(9-B), 2604.
- Gould, R. L. 1978 *Transformations : Growth and Change in Adult Life*. New York : Simon & Schuster.
- Hart, L. 1990 Longitudinal study of women's identity status. *Dissertation Abstracts International*, **50**(10-B), 4807.
- 堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較—教育心理学研究、**41**、11—21.
- Hornstein, A. 1986 The structuring of identity among mid-life women as a function of their degree of involvement in employment. *Journal of Personality*, **54**(3), 551-575.
- 伊藤美奈子 1998 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論、**41**、15-29.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.
- Josselson, R. L. 1987 *Finding Herself : Pathways to Identity Development in Women*. San Francisco : Jossey-Bass.

- Josselson, R. L. 1994 Identity and relatedness in the life cycle. In H.A.Bosma, H.D.Grotevant & D.J. de Letiva (Eds.), *Identity and Development : An Interdisciplinary Approach*. Thousand Oaks, CA : Sage. 81-102.
- Josselson, R. L. 1996 *Revising Herself : The Story of Women's Identity from College to Midlife*. New York : Oxford University Press .
- Kohlberg, L. 1969 Stages and sequence : The cognitive developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of Socialization Theory and Research*. Chicago : Rand McNally.
- 河野喜代美 1983 自立の女性学 学陽書房
- 河野喜代美・平川和子・小柳茂子・山崎礼子 1986 フェミニストセラピー 垣内出版
- Kroger, J. & Haslett, S. J. 1991 A comparison of ego identity status transition pathways and change rates across five identity domains. *International Journal of Aging and Human Development*, 32(4), 303-330.
- Kroger, J. 2000 *Identity Development : Adolescence through Adulthood*. Sage Publications, Inc.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. New York : Alfred A. Knopf. 南博 (訳) 1980 人生の四季 講談社
- Levinson, D. J. 1996 *The Seasons of a Woman's Life*. New York : Alfred A. Knopf.
- Low, J. M. & Bailey, A. 1990 A comparison of vocational identity formation in older and younger women undergraduates. *College Student Journal*, 24 (2), 189-195.
- 前川あさ美・無藤清子・野村法子・園田雅代 1996 複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス 東京女子大学女性学研究所
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology* 3, 551-558
- Mercer, T. M., Nichols, G. & Doyle, C. 1987 *Transition in a Woman's Life*. New York : Springer Publishing Co.
- Miller, J. B. 1986 *Toward a new psychology of women* (2nd ed.) Boston : Beacon Press.
- 難波淳子 2000 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察—語られたライフヒストリーの分析から— 社会心理学研究 15、164-177.
- 西平直喜 1996 成育史心理学序説 金子書房
- O'Connell, A.N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neo-traditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- 岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究、34、352-358.
- 岡本祐子 2002 成人女性のアイデンティティの危機と発達 岡本祐子 (編) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 79-120.
- 岡崎奈美子・柏木恵子 1993 女性における職業的発達とその環境要因に関する研究 教育心理学研究、9、61-72.
- Phelps, C. E. 1991 Identity formation in career development for gifted women. *Roeper Review*, 13 (3), 140-141.
- Pridham, K. F., Lytton, D., Chang, S. & Ruteledge, D. 1991 Early postpartum transition : Progress in maternal identity and role attainment. *Research in Nursing and Health*, 14 (1), 21-31.
- 園田雅代・中金洋子 1989 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究 I : 9年間の自我同一性地位の変化について 日本教育心理学会第31回総会発表論文集、222.
- 清水紀子 2004 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究、15、52-64.
- Spain, A. & Bédard, L. 1991 Motherhood and career : Identity and management of activity spheres. *Canadian Journal of Counseling*, 25 (2), 273-293.
- Spenner, K.I. & Rosenfeld, R. A. 1990 Women, work, and identities. *Social Science Research*, 19 (3), 266-299.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成 : 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究、9、45-55.
- Vaillant, G. E. 1977 *Adaptation to Life*. Boston : Little, Brown and company.
- Watkins, M. 1983 A comparison of student housewife/mothers with non-student housewife/mothers on the characteristics of self-perceived identity, self-esteem, marital adjustment and attitudes toward child-rearing. *Dissertation Abstracts International*. 43 (11-A), 3551-3552. (修士課程)